

あるまちの堀開き

過去を繋ぎ未来を拓く中心の再興

Open Moat for People

The new Core connect Past and Future

11823011

平井未央

主査 篠原 聡子

教授

副査 宮 晶子

准教授 是澤 紀子

准教授

急激な社会情勢の変化、自然災害、戦災等によって幾度も歴史が分断されてきた近代日本において、建築が歴史を繋げることは可能だろうか。城を中心としてはじめた都市は、巨大化していくにつれてその核を失った。人間とかけ離れ、掴み難い存在となった都市に、人間の営みに応答するような、新しい中心を据える必要があるのではないかと考え、本研究に着手した。物理的中心と心理的中心、二つが組み合わさることで、人は初めて場所に愛を抱くのではないだろうか。住民それぞれが、自分を中心に都市を認識していけるような居場所を提案する。

中心の空洞化が著しい都市を対象に、城の起源であり、現在も実存する堀を起点とした計画を行う。水が張られ、石垣がそびえ立ち、住民と都市の中心とを分離させる存在だった堀の水を抜き、堀自体を建築化しながら街へと開く。堀の持つ四面性という特徴を生かし、学校・住宅街・行政施設・宿泊施設・オフィス等、周辺の機能に合わせた建築が、それぞれ堀を乗り越えるように立ち現れ、城内で混じり合う。人間の造り出した大地である堀を基盤として建築が建つことで、堀という歴史的事実が人々の生活と共に後世に残っていくことを目指す。

Keywords: Center, Castle town, Hori, Symbolism, History, Topophilia

中心, 城下町, 堀, 象徴性, 歴史, トポフィリア

1. はじめに

1-1. 研究の背景

1-1-1. 繋がらない歴史

木造建築が主流で、地震が多い日本において、建築の歴史は繋がりにくい。明治維新やモダニズムなど、大きな社会の変化により、幾度も歴史と建築は切り離されてきた。しかし、再開発に対抗する態度として、保存が盛んに行われる今、私たちはもう一度、歴史を繋ごうとしているのではないだろうか。

歴史を保存するという行為は、ある一時期で時を止めることになると、痕跡として残る事があっても、その上に歴史を蓄積していく事が難しい。そして、歴史的価値を保存することが目的となり、誰も中に立ち入ることができない鑑賞物になっていくことが多い。

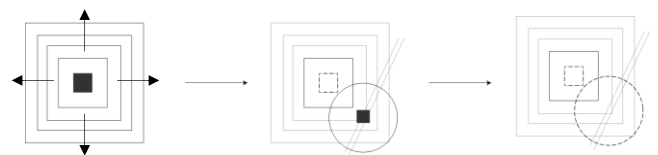
鑑賞物となった建築は、歴史的な文脈や因果関係よりも、過去の人々とそれを見る者との情緒的な同一化に優先順位を置き、仮想現実的な体験をつくりだす。それらは感覚的な魅力を提供することに重きを置き、実生活に溶け込むことはない。鑑賞物のような建築ではなく、その街に住む人の実生活とその街の歴史を繋ぐような建築は可能だろうか。保存や改修、再開発といった垣根を越えて、一度切り離れた歴史を基盤に、今の時代に即した次の形式を考えたい。

1-1-2. 中心の消失

地方都市の中心はどこだろうか。かつては、山や海など自然への畏敬の念から生まれた寺社仏閣を囲むように集落は発生した。しかし、戦国時代に「呪術性」や「神仏への恐れ」が克服され、政治的合理性によって各都市の中心は、土地を治める領主の城となった。しかし、日本が統一された近代国家になると、全体を繋げる交通網によって生まれた駅という新しい拠点、物理的な都市の中心となった。その後、駅を中心に都市は開発されたが、車社会となった都市では郊外に大型のショッピングモールという新たな物理的中心が建っていき、駅を拠点とすることも限界が生じはじめ、駅前の空洞化が各地で進んでいる。

心理的な中心である都市の象徴のような場所と、物理的な中心として、皆がよく訪れる場所、そのどちらも失ってしまった都市は、

図1 中心の変遷



何を拠り所に発展していくのだろうか。中心を基点に広がった都市はスプロール現象を起こし、核を持たない存在となった。(図1)

地方都市が中心を失うと、まとまりを獲得することが難しいだけでなく、アイデンティティを見出すことも難しくなり、最終的には、住む人が都市への愛着を失うことに繋がると考える。中心を失った地方都市における新たな中心の在り方を再考したい。

1-2. 研究の目的

1-2-1. 土地の歴史を繋ぐ

日本において、昔から残っているものを見つけることは難しいように思われるが、都市の多くは、およそ400年前である中世近世の城郭都市を基に築かれている。つまり、私たちの身近な都市の多くが、こうした歴史の上に成り立っている。中世日本は戦乱の世が少ずつ治まると、都市づくりが広まり、都市計画が発展した。それらは土地の選定から行われ、まさにまちづくりのはじまりだった。また、明治維新による廃藩置県は、府県の領域に藩そのものを利用したため、行政の中心が城下町の中心に据えられた。結果、城郭計画が都道府県の骨格となったのである。

かつては2万5000以上もあった日本の城も、江戸時代の「一国一城令」、明治維新の「廃城令」、戦時中の空襲などにより、その多くが姿を消した。石垣は崩され、外堀・中堀は埋め立てられ、多くの街はその内堀のみを残しているのが現状である。実体が消えると同時に、人々の記憶からも消え去り、城下町に住んでいても「わたしの街に城があった」と意識する人はとても少ない。

そんな中、実在する内堀は物理的にも心理的にも都市の中心となりうるポテンシャルを持っている。多くの地方都市に残されている内堀や石垣が、再びその土地に住む人々の生活と共存することがきる建築を考える。石垣という実体が現在も残る堀を敷地とすることで、過去をつなぎ、未来を拓く設計を試みる。

1-2-2 地方都市の中心を再興する

都市の中心が、物理的にも心理的にも意味を獲得したとき、住民はその都市に愛を持ち、ひいては、自らのアイデンティティを確立していけるのではないだろうか。

本研究では、都市の中心に隠れている歴史を繋ぎながら、中心の在り方を民主主義である現代に沿うように再考していく。その際、帝國的な権力の象徴のような中心ではなく、場所の親密な経験と共通の文化に寄り添った地域的な中心の在り方を考える。水平に広がる日本の地方都市に、垂直にそびえる巨大な象徴をつくると視覚的に中心は明らかになるが、そのような従来の視覚に頼りきった方法ではなく、水平都市に溶け込むことができる水平な建築でありながら、人々が自らの知覚を使うことで初めて心理的な中心と思える方法を目指す。

ある一つの地方都市を対象に、その中心を深く探ることによって、他県にも応用できるような形式を考える。中心を失った現在の都市に、効果的な場所・手法を見出し、その土地に住む誰もが自分の居場所だと思える建築を提案する。

1-3. 研究の構成

初めに本稿の目的と背景を明らかにした後、中心の概念と成り立ち、中心の形態について明らかにする。その後、復元の実態について先行研究から分析する。次に、石垣の歴史的価値について見直し、研究対象の実態・歴史について述べた後、設計の提案を行う(図2)。



図2 研究の構成

2. 中心の変遷

2-1. 中心の概念

現象学的地理学者であるイーファー・トゥアン氏は著書「トポフィリアー人間と環境」(2008)で、「中心という概念は基本方位のもつ二極的な傾向を相殺している」と述べた。以下、同書において「中心」について記載された箇所を一部抜粋する。

一空間構成における「中心」と「周縁」の概念は普遍的で、あらゆる地域の人々は自分を中心に置き、外へ向かって価値が小さくなる同心円的なゾーンにおいて、地理的空間やコスモロジー的空間を構造化しようとする。一

一人間は、個人でも集団でも、「自己」を中心として世界を知覚する傾向がある。自己中心主義と自民族中心主義はその程度こそ個人や社会集団によってさまざまであるが、人間の普遍的な特徴と思われるのだ。一

一山は恐れをもって眺められた。それは人々の住む平原の上にそびえたっていた。…世界各国の人々は、山を空と地上が会おう場所と考えていた。それは「中心点」であり、世界軸であり、精神がそこを通過して他の宇宙のレベルへ行けるような、聖なる力の充滿した場所だったのだ。一

一優越性と中心性の幻想は、おそらく文化の維持に必要なのであろう。一

つまり、人間という生き物が自然の中で集団生活を営む際、自己と他者を区別していく必要があり、結果、中心という概念が自ずと発生してきたことが分かる。中心が生まれるということは、同時に自己が確立するということでもある。人間が自己を中心として世界(周縁)を知覚してい

くならば、都市の中心と自己を同一化できた時、人間は都市の中心から自分自身、およびその都市自体を知覚していくことができるのではないかと（図3）。

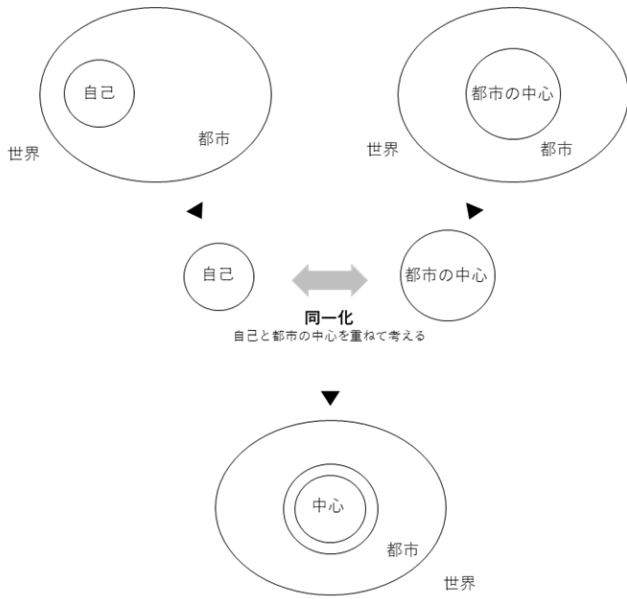


図3 自己の中心と都市の中心

現在のように、都市の中心が定かでない、自己を投影する存在がない場合、人間は「都市」と、「その周りに広がる世界」を等価に知覚していき、都市を把握することが難しく、把握すらできない都市に愛を抱くことは難しい。そこで本研究では、住民が自己と自分が住む都市の中心を同一化していけるような建築を目指す。

2-2. 中国の中心

日本も大きく影響を受けてきた文明発祥の地である中国では、自民族中心主義が著しく発達した。中国では帝国を中心として一連の四角形の領域が置かれていると伝統的に考えられてきた（図4）紀元前5世紀という遙か昔から、この観念は生まれており、大地とは、帝国の都から遠

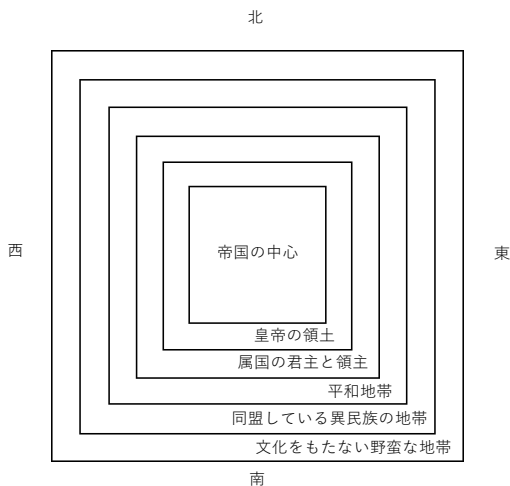


図4 中国における伝統的な中心の観念

ざかるにつれて、しだいに文化の程度が低くなる地域の連なりとみなされていた。中心は皇帝の領土であり、皇帝の居住地である。

2-3. 日本の中心

2-3-1. 城郭都市の成り立ち

日本城郭史学会代表、西ヶ谷恭弘氏は、「城郭都市ができる遙か昔、縄文人たちが集団生活を営んだ集落は、飲料水が近くにあり、日当たりがよく、緑が多く、水はげが良く、狩場が近い場所であった。このような場所は獣たちもまた好んで集まる場所だったため、集落および住居の近くに、獣たちを捕獲できる落とし穴や空堀状の溝を掘った。城という字は『土』と『成』の二字から成る。土を盛るという行為によるもの、すなわち、土を掘り、穴や溝をつくり、掘りあげた土砂で障壁をつくるという意味である。このことから、城の発生は、見方によると落とし穴や防御のための溝と土砂の障壁といえることができる。」と述べている。つまり、日本の城とは、建造物というより、「大地を造成してできた郭(くるわ)」であったと言える。

やがて、集落単位で生活していた人の社会が多くの集落を含む国へと拡大していく中、領主という国を治める者の住まいであり、敵から身を守る場所として城が生まれた。都市間の争いから国家規模への争いへと拡大すると、純粋な軍事施設としての城も現れた。

戦国時代、鎌倉で本格的な城郭都市が形成された。築城は土地の選定から行われ、防御能力の高い地形を利用し建てられた。戦国期は、少数の兵力でも高い防御力を発揮できる山城が主流であったが、それと同時に豪族や武士の館を城郭化した平城の原型も生まれた。平地の館では防御力の高い山城とセットで築城されることもあった。

古くから、城下には集落が形成された。在地領主が居城を構える場所として、その地域の中心集落近くが選ばれ、城には食料・生活用品などの需要があるため、商人や職人が集まった。また、家臣の独自性を否定し、中央集権的な支配体制を確立するため、家臣たちの屋敷は城下に集められた。

2-3-2. 日本の城の発展

日本の城の完成形とも言うべき近世城郭は、本丸を中心に多くの曲輪を設けた複雑な構造、広い堀と石垣や土塁による高い塁線を中心とした防御施設、天守・櫓・石垣など日本独特の建造物を特徴とする。地震の多い日本では石積みの建造物は発達せず、堀や土塁などが城を構成する主体であり続けた。石造りの建造物の代わりに日本人が採った防御力不足の解決法が、「縄張り（城のプランニング）をより進化させること」であった。それらは本丸を核に縦深防御を図る求心的な基本プランを継承しながら、発展した。発展していく過程で、次の三つのタイプに分かれていった。（図5）

(i)山城

戦国時代に多く建てられた、山の上の城。高地での建築は非常に難しい為、他の城に比べて質素である。日本の代表的な城に見られる大きな堀は少なく、地形を最大限に生かして敵に対して有利に立つことができる構造となっている。

(ii)平山城

安土桃山時代以降、武器の主流が刀や槍から鉄砲に代わり、山城では攻撃側の鉄砲隊に一方的に撃たれるだけの状況になってしまった為、平野の中にある小高い山や丘に建てるようになった。平野に近づいた事で、地形を生かした防御機能を維

持しつつ、政治的・経済的な中心機能を満たすことができた。つまり、山城と平山城、双方の利点を併せ持った構造である。

(iii) 平城

戦国時代後期に入ると、世の中が安定し、険しい山の上にある山城に滞在することは、領主にとって不便と見なされる。その結果、平地に建てられ、周囲は土塁や堀で囲まれる構成である平城が好まれた。平城の原型となったのは、鎌倉時代から続く武家の館。貿易などへの利便性を考え、交通の要所である海や川を選んで築城されることも多く、平城の周囲には段々と城下町が形成され、繁栄していった。

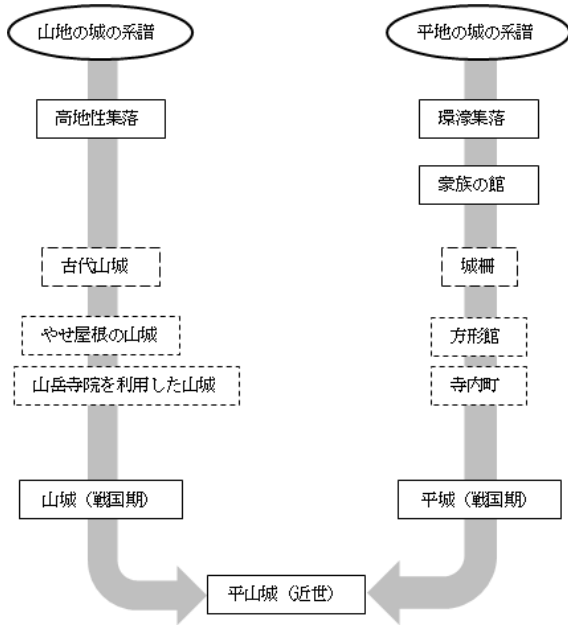


図5 縄張りの進化を示す系譜図

開けた地形に造られる平城は、日常生活の場や地域支配の中心となっていた。よって、本研究では、軍事基地としての役割が薄れ、政治的・経済的な中心としての役割が重要になった、「一国一城令」以降に築城された大規模平城を研究対象とする。

2-3-3. 聖地としての城郭

中世城郭の特質は、霊場などの聖地に構えられ、信仰と同時に機能していたことである。それに対し近世城郭は、古くからの呪術性、あるいは神仏への恐れによる呪縛ともいべき部分が克服され、政治的合理性によって形成されたと考えられていた。しかし、神田千里氏は、「強権によって民衆を抑圧するのみの暴君に統一政治を維持することができるとは思われない。統一政権の実現した『国家』を、民衆の集合心性に属する信仰の問題として考える余地はあるように思われる。」と述べている。

神田氏は、「国家は実は通常考えられているレベルをはるかに超えて、宗教的な現象であり、城が『整然とした観念の秩序を象徴』し、『民衆の集合心性に属する信仰』の対象ともなっていた」と提言した。このことから、城という存在が、幕末から現代にいたるまで、多くの人々の心をとらえ、心理的中心であったことが理解できる。

歴史学者の中澤克昭氏は、「近世城郭は新たに創出された聖地だった。」とも述べている。安土城は神仏が祀られていた安土山に築城さ

れた。近世城郭は聖なる山で成立したのである。寺院は強権的に移動することもあったが、神社はその地の鎮守として、寺院よりはるかに密接な土地との結びつきを持った信仰対象として認識されていた。城内の神仏について着目すると、近世城郭にはヴァナキュラーな聖地という一面もあったと言える。つまり、城郭とは、「整然たる観念の秩序」を象徴する建築と、ヴァナキュラーな聖地のハイブリッドであったことが分かる。

城郭は既存の聖地に「寄生」する、あるいは寄り添うことで、その存在を確かなものにしようとしたのだ。(図6)

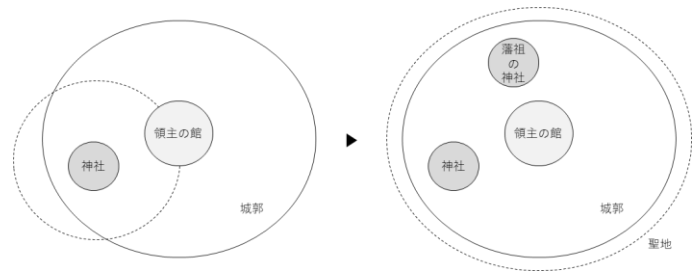


図6 城郭が聖地化する流れ

2-3-4. 消えた天守閣

「天主(天守)」は「天下」の秩序を象徴するものとして創出されたのであり、「天下」の拡大とともに広まった。中澤克昭氏によると、『天』の思想は中国が起源だが、『天』によって正当化され荘厳化されるということに限れば、日本の近世の権力の在り方は中国とよく似ている。しかし、城が象徴していた思想・理念は中国の思想そのものではなく、日本的に解釈された『唐』と『和』の組み合わせだった。「俗的な支配」と称されてきた近世政権は、実は、「儒教的な倫理」や「天道」思想に裏打ちされたものであった。そして、擬中華風建築とも言われる城郭建築の意匠はそれを具現化している。

天守の役割・機能については、籠城戦における「最後の拠点」「城主の居所」「展望台」「司令塔」「貯蔵庫」「倉庫」「政治装置」といったことが指摘されてきた。天守閣のはじまりと言われる安土城を建設した織田信長は自分の権威を象徴するものとして天守を建て、実際にその中で暮らしたが、江戸時代に建てられた天守で居住空間として利用された例はない。平和になると、住みにくい天守は必要とされなくなり、物置や空き家のような状態になる。そのため、火災などで損失した後、再建されることは非常にまれで、江戸中期からは、城は鎌倉時代の屋敷を元に、とても機能的に造られていた。天守が残っていた城も、江戸時代の「一国一城令」、明治時代の「廃城令」により、その多くが失われる。

一国一城令とは、1615年に徳川幕府が交付した政令で、一国につき一つの城を残し、その他の城はすべて廃城にするものである。目的は、諸大名の軍事力削減で、およそ400もの城が壊された。

廃城令とは1873年に明治政府より交付された政令で、それまで陸軍省所轄財産であった城郭の土地建物を、今後も陸軍が軍用の財産として残していくものを存城処分、それ以外を大蔵省所轄の普通財産として、廃城処分するというものである。存城処分と言っても、現在の概念である「文化財」として土地や建造物を保存しようとするものではなく、陸軍の兵営地等として旧来の城郭建造物、石垣、樹木等を整理すべしとしたものである。廃城処分となった城は、地

方団体や学校敷地等として売却するための用地となった。

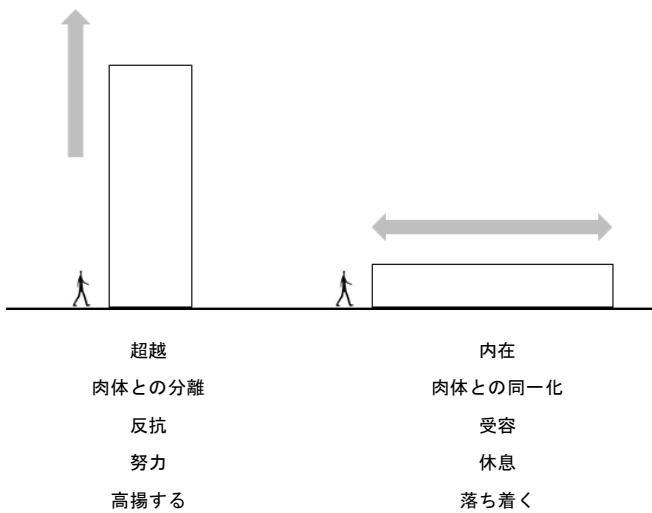
一国一城令も廃城令も、政治体制の変化によって都市の単位が大きくなり、各都市のヴァナキュラーな聖地的存在であり、心理的中心である城が、破壊されていったことが分かる。

2-4. 中心における垂直と水平

宗教学者のミルチャ・エリアーデは「世界の軸」という概念を、「天との交流を目的とした外的世界『カオス』に対する内的世界『コスモス』の起点」として位置づけ、柱、梯子、山、樹等様々な形象によって表現されると述べた。古くから宗教建築は垂直性のある搭状のものや、山の上に建てられる事が多かったように、神聖な中心「聖地」には垂直の建築が用いられることが多かった。しかし、水平に広がった日本の中心では天守閣が根付かなかったように、垂直な形態はこの国の風土にそぐわないのではないか。

イーファー・トゥアンは垂直空間について、「肉体から分離し、空へ向かう精神性の観念」を持ち、水平空間は、「地上に縛られた同一化の観念を持ち、受容と休息を思い出す」と述べた。信仰の中心に建つ建築は、神というこの世と離れた世界に生きるものを表象することが目的だったため、垂直空間は有効だった。また、帝国が治めた中世近世時代は、中心の建築は権力の象徴でもあった。(図7)。

図7 垂直空間と水平空間が生み出す感情・意識



元々、領主の館も寺社建築も水平に広がっていた日本では視覚に頼った垂直空間ではなく、土地に覆うように広がる水平空間によって土地と自分を同一化できるような象徴性を生み出してきた。本研究では、物体を超越化する垂直ではなく、内在化させる水平空間を用い、人間が、建築や土地、歴史と、自己を同一化できるような空間を目指す。

3. 広まる復元

3-1. 模擬天守閣と城址の公園化

天守に対する憧れは各地で見られ、現存天守は12基にも関わらず、再建天守は80基近く存在している。そのうち、木造で再現されたのは5基のみで、その他は戦後活発につくられたRC造の外観復元天守が9基、忠実ではないが、天守が存在していた場所に再建さ

れた復興天守が13基存在する。残りの52基は史実に残されていないものの、天守が欲しいという想いから再建されている(図8)。

天守は物見としての役割が大きく、戦後必要とされなくなったが、都市の象徴として重要な役割を担っていたため、人々に求められていると考える。城が消えても、堀など外構は全国に存在し、その多



図8 天守の種類

く当初は明治政府の軍用地となっていたが、その後大学など一部の機関が独占するものとなり、現在は、開放して公園となっている。

野中勝利氏は模擬天守閣の意義について「経済を動かすため」「産業開発」「求心性創出」「歴史観光の養成」「公園の美化」「地方の将来繁栄」「展望の施設としての役割」「文化的共有財としての象徴性」

「視対象になるもの」が挙げられると述べている。また、1931年にRC造で再現された大阪城天守が成功例として挙げられており、それに習うように再建天守が増えていったことが分かる。また、模擬天守が設計される時は、「内部はともかく、外部は四方どこからみても美しくつくる」ことを目標としていることが多く、視覚的な象徴物として機能していれば十分と考えられていることが分かった。

しかし、これらのように今は使われることもなく、想像の中で生まれたような不確かな天守が、これ以上増えて良いのだろうか。

3-2. 「復原」無用論

山岸常人氏は「復原無用論」を発表すると、その中で復原の意義についてこう述べている。「発掘調査によって検出される過去の時代の発掘遺構は、基本的には地表面より下の部分しか残っておらず、そこからかつての形態を想定することは容易ではない。形を再現する行為は発掘調査の成果を明示するために有効。」つまり、「社会教育的意義」と「歴史学研究としての意義」という二つの側面を持つのだ。しかし、「復原において形態が完全に解明されることは不可能。また『復原』された形態のみに価値があるわけでもない。」と現代の復原至上主義に異論を唱えている。

山岸氏は、遺構から分かることについて以下のようにまとめている。

ア. 確実に分かること

- ①平面の形式や規模 ②基壇があればその規模
- ③床・縁の有無 ④礎石か掘立柱か
- ⑤掘立柱の痕跡や礎石上面に柱のあたりがあれば柱径

イ. ある程度推測できること

- ①掘立柱の場合には柱がどの程度の高さであったか
- ②基壇や雨落溝から軒の出
- ③軒の出によって軒が何軒か、また組み物の種類
- ④屋根形式 ⑤出土遺物から屋根材料

「究極のところ『復原』とは『復原』設計者の嗜好の産物」に他ならず、その本質は現代建築と変わらないのである。

判明しないものは、分からないと明言する姿勢こそ重要であり、歴史学研究成果を一般に還元する方法は、見栄えのする形を提示することだけではない。「文化財建造物の『復原』は「歴史を隠蔽」して一般に示すため、歴史の一側面のみを切り取って顕在化させているとも言える。

これらことから、復元は忠実な再現が不可能に近く、歴史をある一点で止めて、見る人を誤った解釈に導いてしまう危険を秘めた行為であり、結局、現代建築を設計することと同義に近いということが分かった。よって、歴史的事実は大切にしつつ、現代の人々が歴史と出会う空間を新たに創出することが今後重要になってくると考える。

3-3. 復元に代わる態度

リン・ハント氏は著書「なぜ歴史を学ぶのか」で「専門職の歴史家たちは歴史的な再現や視覚的な歴史的経験に対しては批判的でときに軽蔑的である。」と述べている。これらは文脈や因果関係などの深い理解をおろそかにし、過去の人々と見る人との情緒的な同一化を優先する。情緒

的な過去との同一化より、過去も未来も含め、土地そのものと見る人との同一化は図るべきである。

とはいえ、ハント氏は、「記憶戦争のために、歴史的事実を確定することは決定的に重要。」であるとも述べ、歴史的事実については「事実」と「解釈」の二層構造になっていると述べている。「議論する目的でそれらを分離することは可能だが、現実の歴史実践の中で、ふたつは相互に結び付いて」おり、「事実というものは意味を与える解釈に組み込まれなければ、動き出すものではない」とする。

これらことから、本研究では現代の日本における歴史的「事実」を見つけ、その「事実」に対し、新たな「解釈」を付加するような建築を設計する。建築は言語を媒体とせず解釈を紐づけていくことができるため、自然と見る人に解釈が委ねられる。また、実生活と歴史を繋げることで、自発的に土地と自分を同一化できると考える。

4. 実存する歴史：石垣

4-1. 石垣の本質的価値

古来より、日本は外縁に石を積むことで新たに平坦な土地を造成したり、海岸・河川等の岸辺を侵食から防護したりする土木技術を育んできた。そのひとつが城跡の石垣であり、特に近世の城跡において最も高度に発展をとげた。「石垣整備のてびき」には、「最適な場所を選ぶとともに、石を選び、割り、運び、積み上げていく技術、及びそれらの結果現れる構造体とその景観、さらにはそのような技術を持つ職能集団、維持管理に関わる生活習慣の総体は、我が国に独特の土地造成に関わる土木技術の文化的所産であるといつてよい。」と書かれている。

特に、城の石垣の多くは「歴史上の政治的背景の下に築造されてきた経緯を持ち、築造の過程を表す痕跡及び技術・伝統は、次世代へと伝えるべき有形・無形の価値を持っている。」と言われている。石垣は社会的要請に合わせて変化し、様々な意味を持ってきた。山城の石垣は東南アジアにおける国際的な緊張関係を表し、戦国期の石垣は、他方の勢力が全国政権へと組み込まれていく過程を表す。近世の城跡の石垣は封建領主が政治権力と威信を示す、美しさをも備えた空間装置だった。以上より、石垣は「歴史の証拠」としての性質を十分に持っていることが分かる。

石垣は石を利用した土木建造物の中でも、特に「安定した構造体」としての性質を持つ。それは築石（平石）、裏込め（栗石・砂利層）、背面基盤層（盛土・地山）の3者の密接な補完関係の下、地震や風雨など自然災害でも、その安全性を保持してきた。個々の築石を固定し、緊結・接着するのではなく、空積み構造を基調とすることにより、圧力を適切かつ調和的に分散する構造になっているからである。更に、背面には裏込めを設けることにより、速やかに雨水を処理する構造となっている。

更に、石垣の石材はその土地でとれた物が使われ、地域固有の自然素材を使用することによって、地域性も生み出している。

石垣は「歴史の証拠」「安定した構造体」「地域固有のか

たち」という3点において、価値が認められることが分かった。本研究では、これらを踏まえ、石垣を基盤とする建築を提案する。

4-2. 石垣の管理および維持について

古くから石垣づくりに携わる人は「穴太（あのを）」と呼ばれてきた。近世穴太の家訓は「石が行きたいところに行かせてやる」というものだった。丈夫な石垣を目指し、根石の据え方、築石同士の安定の図り方、勾配角度の決め方、上・下石財で石面の合わせ方、石尻への介石の入れ方、築石胴部の合わせ方など、石垣の「積み方」より、一石ごとの「当たり」を重視した「据え方」を大切にしていた。「石垣のてびき」には、石垣を保存する際に考慮する事項が以下のように挙げられている。

- ① 積み上げられた状態で遺存する部分を最大限に生かすこと
- ② 表面のみならず、背面を含め立体的な遺構として取り扱うこと
- ③ 全体を「歴史の証拠」であるオリジナル・代替不可な遺構として扱うこと
- ④ 築石（平石）・裏込め（栗石・砂利層）・背面基盤層（盛土・地山）の3要素からなる「安定した構造体」として調和した状態を維持すること
- ⑤ 築造・加工の技術を伝承すること

石垣の修理（復旧）には、石垣を解体しないものと解体するものの2種類があり、前者は、①石垣に触れることなく維持的に保存すること②破損・変形の手遅れを遅らせること③間詰め石等を増やし強度を高めることを目的とする。

本研究では、隣との「当たり」を大事にした建築構成としつつ、石垣を部分補強していくように設計を行う。

5. 研究対象

5-1. 福井城址

近世に平城の完成形とも言える大規模平城が形成された福井城址を敷地対象とする。

5-2. 歴史の中で消えていく堀

現在の福井市街地のきっかけを切り開いたのは1575年に織田信長より越前一向一揆の平定を命じられた柴田勝家である。柴田勝家は安土城に匹敵する巨城「北ノ庄城」を築く。北ノ庄城は、足羽川と吉野川の合流した平野に築かれ、天守は7層、一説では9層だったと言われている。

1583年、豊臣秀吉によって攻められ、柴田勝家と共に北ノ庄城は焼失した。1600年徳川家康の次男・結城秀康が越前68万石を拝領し、翌1601年に北ノ庄城の築城に着手した。御家門の居城として相応しいものになるよう、約6年の歳月をかけて完成に至った（図9）。本丸には4重5階の天守があったが、1669年に焼失して以降、再建されることは無かった。石垣をはじめ、石瓦、基礎石に至るまで、近くの足羽山で採石された「笏谷石」が使用されていた。青緑色の石垣は美しく、横のラインが通った「切り込み接ぎ」という積み方で積まれた。これは、二条城や江戸城など、一級の城の積み方と同じである。

明治維新の廃城令で内堀以外の堀が埋められると、堀の

跡地に市街地が形成された。1881年に「福井県」が発足すると、堀端通りに面して庁舎が建てられ、1923年に福井城址に洋館の福井県庁舎が移設される。以降、1945年の福井大空襲、1948年の福井大地震でも崩れなかった石垣は現在も福井市街地の骨格となっているものの、外縁に

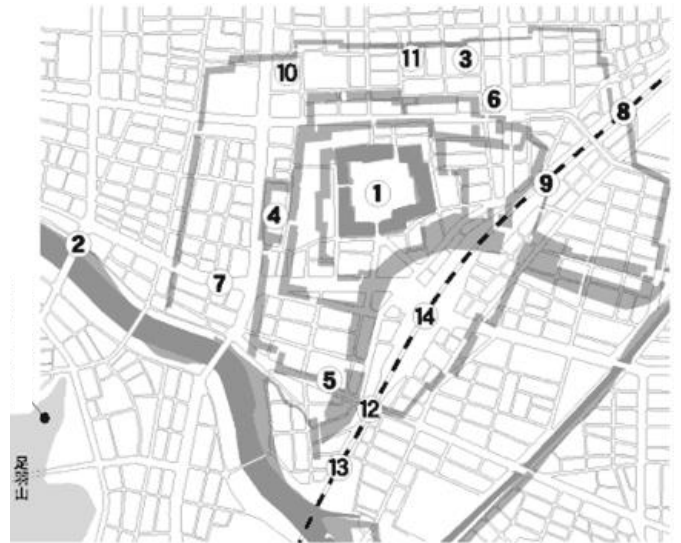


図9 福井市街地図に、城郭を重ねた図

は高層の建物があるため、中央通りからは見えない。

5-3. 城内の現状

福井城址は全国で唯一、内堀に県庁と議事堂、警察本部が連立して建てられ、今も城が政治の中心として機能している（図10）。

また、石垣や天守台などは当時のまま残されており、天守台の一部は福井地震で崩れたままの状態で見守られている。

しかし、行政が城内を独占した結果、県民が入り出しにくい場所と



図10 福井県庁の様子（上空より）

なっている。そこで県は、県庁を移設し、城址を文化的地区として再編する計画を発表した。2020年現在、移設予定地が発表された。

6. 提案

6-1. 設計趣旨

急激な社会情勢の変化、自然災害、戦災等により幾度も歴史が分断されてきた日本において、建築はどのように歴史と向き合うことができるだろうか。城郭を中心に広がった近代都市は、巨大化・複雑化するにつれてその中心を忘れ去った。核を持たない、掴みきれ

ない存在となった都市に、大きな力によって生まれる中心ではなく、小さな営みに応答するように生まれる新しい中心を据える。

新しい中心は、住む人それぞれが、自分を中心に都市を認識していけるような居場所となる。いつしか人は都市の中心を我がものとして考えるようになり、自分を愛すように都市を愛すだろう。

城の初源であり、都市の骨格として今も残っている堀の水を抜き、ひとつの建築にすることで、輪郭線から中心点へと変換する。そして、「住民」と「都市本来の中心」とを隔てる存在であった堀を四方から乗り越えるように建つ建築は、人々を中心へと誘う。

「人間の造り出した大地」を基盤とした建築が建つことで、堀という歴史的事実が、人々の生活と共に後世へと残っていく。

6-2. 設計手法

2-1. 四方から集まる異なる欲望

入れ子状という性質によって、外に向かって中心の力を「拡散」するように成立した都市に対して、直角に建築を配置することで様々な街の要素を中心へと「収束」させていく(図25)。堀の四面性という性質によって、各面が「住宅地」「オフィス・ホテル街」「学校」「公園・神社」と異なるエリアに接しているという地理的特徴を生かし、各々が必要な機能を内包する建築が、周縁から建ち上がる。

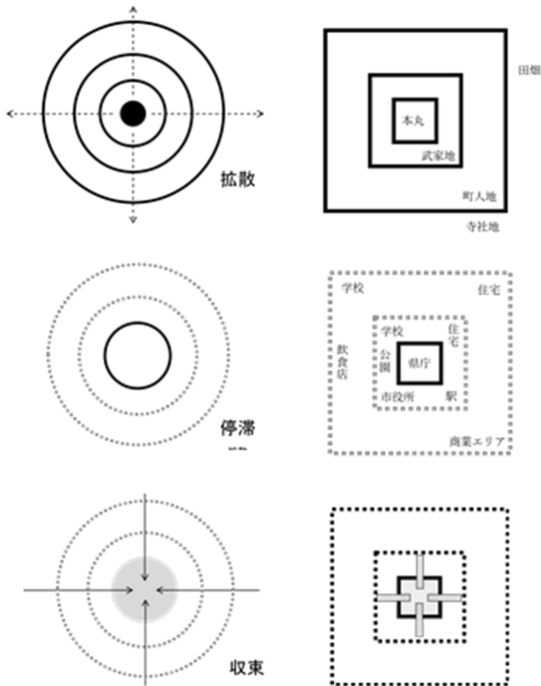


図11 輪郭式平城における新しい中心の手順

2-2. 堀のたわみを支える

石垣は堀に向かって広がるように、独特の曲線を描いて積み上げられていくが、時が経つと、「はらみ」が発生してくる。そこで県が発表している、現在の福井城址の石垣のはらみが確認される箇所を対象に、石垣に接触し、石垣を乗り越えながら、補強もできる建築を設計する。また、はらみのない箇所は、可逆性を考慮して設計していく。

2-3. 異なる断面の集積

高くそびえる石垣を乗り越える方法を用途や場所・石垣の状態に合わせて考えていくと、様々な断面的関係性を描くことができる。

堀周辺の個別階である断面を集積させることで、隣との衝突や介入など、新たな空間の関係性が生まれる。

個々がばらばらにつくられ、全体を俯瞰することが難しくても、堀という巨大な存在を共有することで、建築はひとつになる。また、各空間で石垣と出会う体験を、各々の感覚で記憶していくことで、全く別の空間にいる人とも、都市への意識を共有することができる。

2-4. 石垣との出会いを演出する

これまで、遠い存在で、「見る」ことしかできなかった石垣を内包する空間を設計することで、石垣のさわり心地やにおい、一つ一つの石の形状など、より知覚的に感じるようになる。

6-3. 図面各種

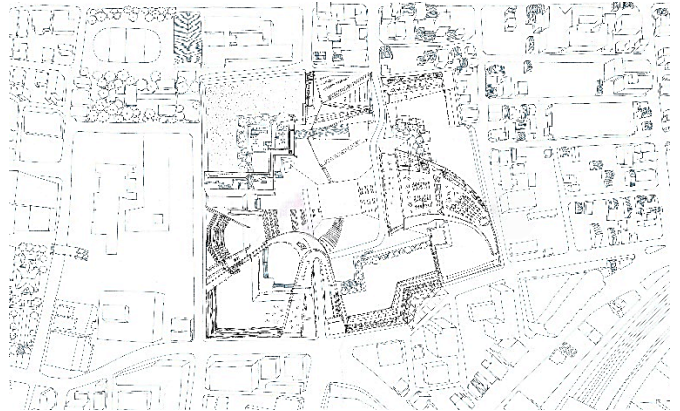


図12 平面パース

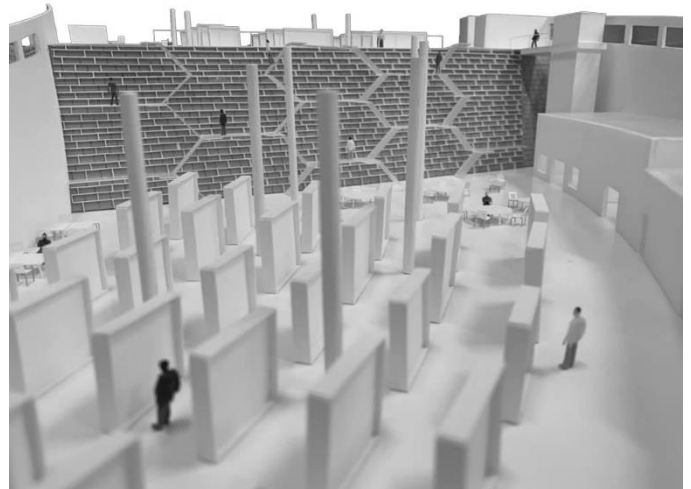


図13 図書館内部模型写真

それぞれの建築によって生まれた個人の記憶は、建築が堀という骨格によってひとつになるように、いつしか都市全体の記憶となっていくだろう。

主要参考文献

- 1) 「トポフィリア・人間と環境」 イーファー・トゥアン 2008.4.10
- 2) 「なぜ歴史を学ぶのか」 リン・ハント 2019.10.17
- 3) 「石垣整備のてびき」 文化庁文化財部記念物課 2015.1.15
- 4) 「日本名城図鑑」 西ヶ谷恭弘 1993.12.10
- 5) 「城下町と日本人の心性」 岩下哲典 2016.3.31
- 6) 「日本の城」 香川元太郎 2018.12.25.